

小宮豊隆

注

釈



注

釈



明治三十八年九月十六日中川芳太郎宛の漱石の手紙に、  
「一寸申上ちよつとます。昨夜来客があつて帰ろうとすると帽子がない。玄関にあつた小生のゴム製の雨具がないよつて泥棒だろうと云う鑑定であつた。」

所が夜更に及んで月を見ながら縁えんの下をのぞいて見たら君から来た三重公の手紙を入れた状袋じょうがある。而しかして中身がない。して見ると是も泥棒君の所しよ為いだと思ふ。三

重吉君が三間余さんげんの手紙を天下の珍品と心得て持つて行つたとすればこの泥棒は中々話せる泥棒に相違ない。然し君の所へ来た手紙を僕がぬすまれて平気で居る訳にも参りかねるによつて一寸手紙を以て御詫おわびを致す訳だがね。どうか御勘弁にあずかりたい。向後こうご気をつけると申したいが僕の家は是より氣のつけ様がない。氣をつけるなら泥棒氏の方で氣を付けるより仕方がない。尤もつともあんなうつくしい手紙を見たら泥棒も発心して善心に立ち帰るだらうと思うからその内手紙も自然どこかから戻るかも知れない。戻またつたら正まことに返上仕るから左様御承知を願ひ

度い。先は古今未曾有の泥棒事件の顛末を御報に及ぶ事  
しかり。是で見ると今迄も色々なものが紛失して居るの  
かも知れんが少しも気がつかない。随分物騒な事だ。こ  
のつぎは僕の書齋を焚き払うかも知れない。泥棒が講義  
の草稿を持って行ったら僕は辞職する訳だが泥棒君も  
中々仁恵のある男だ 以上」

この手紙は、いろんな意味で、面白いと思う。第一に  
是は、いかに漱石が三重吉の手紙に動かされていたかを、  
表現する。漱石は「あんなうつくしい手紙を見たら泥棒  
も発心して善心に立ち帰るだろう」とまでも言っている。

第二に是は、凡そ漱石の頭が、一つの刺激に会って、どういふ風に動いて行く事を常としていたかを、表現する。

「向後気をつけると申したいが僕の家は是より気をつけ様がない。気をつけるなら泥棒氏の方で気を付けるより仕方がない。」というのだの、「是で見ると今迄も色々なものが紛失して居るのかも知れんが少しも気がつかない。随分物騒な事だ。」というのだのが、それである。

第三に是は、自分の遭遇した不愉快な事に、どういふ風にして漱石が風を入れる事を常としていたかを、表現する。その場合漱石は、「泥棒が講義の草稿を持って行っ



たら僕は辞職する訳だが泥棒君も中々仁恵のある男だ」という風に、現在よりももっと悪い場合を想像する事によつて、現在の不愉快に寛ろぎくろぎをつけようとするのである。――

然し、私が今此所で「註釈」しようとしているのは、実はそういう点にあるのではなかつた。それはもっと物的の、三重吉の「三間余の手紙」の行衛ゆくえに就いてである。

元来漱石のうちには、千駄木、西片町、早稲田南町とかけて、どういふものか、よく泥棒が這入つた。この前にも、例えば明治三十八年四月十三日森卷吉宛の手紙の

中に、「僕も君の様に泥棒に這入られた綿入がなくて裕あわせで少々寒いです。」とあるように、漱石は泥棒に這入られて、いろんなものを持って行かれています。もっとも是は、明治三十八年七月発行の『ホトトギス』で発表された、『猫』第五の重なる材料として用いられた。その意味でこの泥棒は、相当漱石の創作欲を刺激したものだと言よって可いのである。但ただしこの泥棒が、果して山の芋の箱まで持って行ったものかどうかは、訊いてみた事がないから、私には分からない。次いで、この後にも、例えば明治四十一年十二月十九日鈴木三重吉宛の手紙の中

に、「先達泥棒這入る。兩三日前赤ん坊生る。是にて今年も無事なるべきか。」とあるように、漱石はまたしても泥棒に這入られている。是が不思議に帯ばかりを狙う泥棒で、漱石の所から大小合計十本の帯を盗んで行ったという事は、明治四十二年一月十五日から十六日へかけて『東京朝日新聞』に連載された、漱石の『泥棒』（『永日小品』）の中で報告されている。この泥棒も亦、<sup>また</sup>漱石の創作欲を刺激した泥棒である。

然しこうい<sup>ほか</sup>うのは、言わば「記録」に残っている泥棒で、その外私の記憶に存しているのでも、例えば漱石の

ニツケルの袂たもと時計一つだけ盗まれたというのだの、玄  
関に脱いであつた森田草平の靴と一緒に漱石の二重廻し  
が盗まれたというのだの、いくつも例があるのだから、  
そういうのを寄せ集めて見たら、漱石のうちへ這入つた  
泥棒の頻度は、相当の高さに達している筈だと思ふ。そ  
れにしても、三重吉の「三間余の手紙」が盗まれたなど  
というのは、漱石の書いている通り、まったく「古今未  
曾有の泥棒事件」だつたに違ひないのである。

然し事實は幻滅的であつた。泥棒はその「三間余の手  
紙」を「天下の珍品と心得て持つて行つた」のでもなん

でもなかった。泥棒は一般に、仕事にとりかかるとか後とかに、気を落ちつける目的か何か、まじないとして大便をする習慣を持っているというが、この泥棒も亦その目的の為に、手近にあった手紙を、そういう、漱石が大事にしている手紙とは知らずに、持ち出したのに過ぎなかった。下女だか柏木屋だかが、後になって裏の方で、その事実を発見したのだそうである。

ずっと後になって、私と三重吉とは、その話を夫人の口から聴いた。それを聴いて三重吉が、実に厭な顔をしたのを、私は今でもありありと想い起こす事が出来る。

自分の心を打ち込んで書いた手紙が、そんな残酷な運命に曝されたという事を知ったのだから、不愉快な思いをするのに無理はないと、私もその時沁々しみじみと三重吉の心持に同情した。勿論二人とも、夫人に対して不快の念を懐いたのではないのである。そういう事実そのものが不愉快だったのである。然し漱石は、後にも先きにもその事実を、自分の口からは、三重吉にも外の人にも誰にも、ひと事も言わなかった。況んや物に書いたりなぞ、なおの事しなかった。漱石は恐らくそういう事を、三重吉に言うに忍びなかったのだらう。のみならず漱石は、この

泥棒の仕打で、自分の持っていた美しい「夢」が、無残にも踏みにじられたような気さえしたに違いないのである。

『漱石全集』（昭和十年版）月報第十四号

（昭和十一年十二月）





日本文学電子図書館

---

注 釈

著 者：小宮豊隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館